

# 舞踊学の新しい方法を探る

—舞踊教育における知を巡って—

大貫 秀明

## 1. はじめに

この機会に其れとなく課された事項が二点ほどあった。それらは、まずラバンセンターにおける最近の舞踊研究の状況を報告すること。そしていま一点は、その内容から敷衍して可能なかぎり当シンポジウムの標題に“漕ぎ寄る”こと、であった。

その要請になんとか応えようと考えた末、少しは整合性を保てそうに思われた内容は舞踊学のうちの舞踊教育 (Dance in Education)<sup>1)</sup> に係わると思われ、ついでには上記のような副題 (演者題) を設けた次第である。海外の動向のいくつかを概観しながら、終極的にはなんらかのかたちでここ日本の斬界にも寄与できる内容であることを願っての些細な考察である。なお、紙幅の関係上ここではシンポジウム当日にお話しさせて戴いたうちの一部は割愛せざるをえないが、骨子からの逸脱はないものと確信している。

## 2. ラバンセンター：基幹科目の変容

舞踊教育者の養成とノーテーション学習の場としてつとに知られてきていたラバンセンターも現在では総合的な舞踊教育機関へと変貌を遂げつつある。その動向に連動するかのようになり、同センターが設置するほとんどの課程に組み込まれる基幹科目にも変化が見られる。具体的には、動きの分類とそれを括るノーテーション (Labanotation) を核に踊る・創る・観るを考察し、また実践するとする『Movement Study』から、より大きな学体系のもとで舞踊を促えようとする『Choreology』 (= Study of Dance) への変化である (文末資料：図-1の(i), (ii), (iii)参照)。確かに『Movement Study』に固執しては舞踊を“アログラフィク” (N. グッドマン)<sup>2)</sup> なものとして促えがちであろうし、舞踊の表象的側面の考察には不備をきたす。また、「動き」をあくまでも舞踊の主要媒体とするには昨今日にする作品の多くは、その考えに対する納得をわれわれには与えてくれない。(文末資料；図-1, (iii)の(7), (17), (18), (19)に注目して戴きたい——これらがかつての同センターの基幹科目の主要内容であった)。こうしたラバンセンターにおける変化には、あらためてわれわれに舞踊現象の多様性、すなわち舞踊にまつわる多様な知の存在をいみじくも認めさせる<sup>3)</sup>。しかし、周知のとおりアメリカでの舞踊研究の世界ではどうに経験済みの

ことであり、注目すべきはラバンセンターにおける今後のその内容の消化・発展の仕方である。

## 3. 舞踊教育における知

### 3.1 アメリカの舞踊教育界の動向：認識学習へのシフト

舞踊の多様性を懐深く抱え込んできていたアメリカ舞踊界ではあるが、そのうちの教育の世界では80年代初頭以来のかの地の教育改革の波を受け、より実質的な教育成果を求める機運が高まるとともに或る変化が緩やかではあるが顕現してきている。知識をベースにした教育、いわゆる認識学習への傾斜というのもそのひとつである。

S. フォーティン<sup>4)</sup>は、Conceptual Content Knowledge<sup>5)</sup>ならびに Technical Content Knowledge<sup>6)</sup>の教授の必要性を舞踊教員、殊に実技担当教員に説いている。その内容のうち“卑劣な”一例を引いてみよう。かりにグラムの「コントラクション／リリース」を扱っているとすると、その目的は脊椎の周囲を取り囲む主たる筋、すなわち広背筋・大円金・外腹斜筋・僧帽筋を鍛えることにより、脊椎ならびに上体全体が容易に支えられ、それによって下肢の動きのレンジが広がり、また、ボディー・センターにもよく気づくようになる、といった解説を施すことの必要性を説いている (C-C-K関連)。また、正確な師範と的確な被教育者の実践に対してのコメント (言説) の供与も不可欠であるとしている (T-C-K関連)。こうした教育内容ならびに方法の展開の背景には、舞踊教育というものがどうしても「皮相的な身体経験」に終始しがちであり、またその点を殊に他教科関係者から批判されがちであることからの反省と推察できる。

元来、アメリカの舞踊教育界はプロの世界との絆が強く、プロの世界での事象が教育の場に直ちに反映されてくる、いわゆるトップダウン型である。しかし、そのプロの世界が“Anything goes”的な雰囲気包まれ、また、上述の教育改革の圧力が身近に迫ったことがフォーティンの主張にもみられる努めて実質・直截的な知識の教授といった動向となって現れているのであろう。

### 3.2 日本の舞踊教育界を探る：出来事から経験へ

限定的ではあるが海外二つの国の舞踊教育界の、

その異質なトレンドに注目しながら日本の舞踊教育界を眺めてみると、体育の傘下におさまりながら、その体育自体が度重なる存亡の危機（大学レベル）ならびに学習指導要領改訂の折々に座りの悪い思いをするなか、日本の舞踊教育は人間の成長・発達という観点から営々とその基盤を確立し今日に至っている。そこに(紐)日本女子体育連盟の並々ならぬ勉強があることは今日海外の舞踊教育関係者さえもよく知るところである。しかし、体育の傘下ゆえの授業時間配分の乏しさからか、はたまた、同傘下ゆえによる舞踊そのものの指導経験の希薄な教員の存在を意識してか、この国の舞踊教育における研究には「いかに」（方法）が「なにを」（知識）をはるかに凌駕する傾向にあるようだ。そこで案じられるのは、「だれに」（被教育者）の間に教科としての舞踊が有する主意・意義が希薄な「出来事」的イメージだけを強く抱かせてしまう危惧が潜んでいることである。その被教育者になりより欲しいのは内省（例：自らの行為の分節と同化）の瞬間を提供する「経験」である。そこで敢えて提案したいのが、「からだ」もしくは運動を生じさせる主体としてのからだといえる「身体」というものに関する知を「定点」とし、その教授・獲得ということを従来からの踊る・創る・観るという教育構造の内部に「下部構造」として促えるということである（文末資料：図-2参照）。もちろん、そのことによって舞踊教育にとって大切なプロダクトを重視しつつプロセスを眺むという姿勢をないがしろにすることがあってはならないことは言うまでもないのだが。

中等教育以上で舞踊（ダンス）が選択制になった現在であるからこそ、【からだを知る】（身体的事実の知）、【からだを聴く】【からだを放つ】（個人的な知）の育成という教育環境の設定、すなわち守旧を若干脱却する発想があってもよいのではないか。それが被教育者の舞踊経験に綾をもたせ、ひいては舞踊自体が否定しがたく体性・運動感覚的なものであることから、広く「サポーター」を未来に育むことにも通じるのではあるまいか。また、その過程には被教育者の学習の進捗状況を推し量る側面も秘められているし（例：即興を通してのKR情報）、については評価への多様で柔軟な対応の道も秘められているように思う<sup>7)</sup>。

#### 4. おわりに

知識の教授は教育の大切な目標ではあるが、それはあくまでも一要素である。だが、この要素は欠いたところに教育はない。国の内外を問わず、舞踊教育はいまこの原点を再確認ならびに再検討する試練を与えられているのかもしれない。そして、その研究射程にこそ舞踊教育の新しい展開があるように思える。

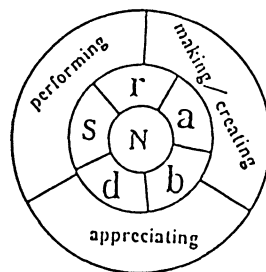
#### 註・引用文献

- 1) 学校における舞踊教育を指す。よって、舞踊のスタイルとしては主としてコンテンポラリー／モダンが念頭にある。また、ここにおける考察の対象とする被教育者のレベルは中・高等教育としたい。
- 2) Goodman, N. Language of Art — An Approach to a Theory of Symbols — The Harvester press. 1981. pp. 113—122.
- 3) この点に関連させて「記述的批評」の是非をめぐる以下の者たちによる論争を読むことは非情に興味深い。  
Copeland, R. Dance Criticism and the Descriptive Bias Dance Theatre Journal vol. 10. No. 3 Laban Centre pp. 26—32.  
Cohen, S. J. Response to Roger Copeland  
Rimmer, V. Deconstructuon and the Descriptive Bias op. cit. vol. 10. No. 4 pp. 3—4および p. 55.
- 4) Fortin, S. Content Knowledge and Dance Education Oliver, W. (Ed) Focus on Dance x : Dance in Higher Education American Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance Virginia 1992, pp. 35—40. The Knowledge Base for Competent Dance Teaching JOPERD Vol. 64. No. 9. Nov. -Dec. 1993. pp.34—38.
- 5) 言説化可能な「宣言的知識」(Declarative Knowledge)、いわゆる Knowing-that。  
6) 「手続きの知識」(Procedural Knowledge) なり「実際知／実践知」(Practical Knowledge) ともよばれる、いわゆる Knowing-how。  
【補】Declarative, Procedural に Affective Knowledge「感情(feeling)にまつわる知」を加えたものが、舞踊教育を取り囲む大きな知の枠組みと考えられる。(図-2参照)なお、その「大きな知の枠組み」を舞踊経験の総体を取って分類・抽出したものと考えてもよい。
- 7) 『「わざ」から教育を考える』 生田久美子 imago 1992.6. を参照されたい。

#### 参考文献

- Ryle, G. The Concept of Mind Hutchinson 1949. Penguin Books 1963.  
邦訳『心の概念』坂本百大 みすず書房 1987.  
Gomez, N. Somarhythms : Developing Somatic Awareness with Balls JOPERD April 1992. pp. 71—76.  
Green, J. The use of Balls in Kinetic Awareness JOPERD October 1992. pp.61—64.

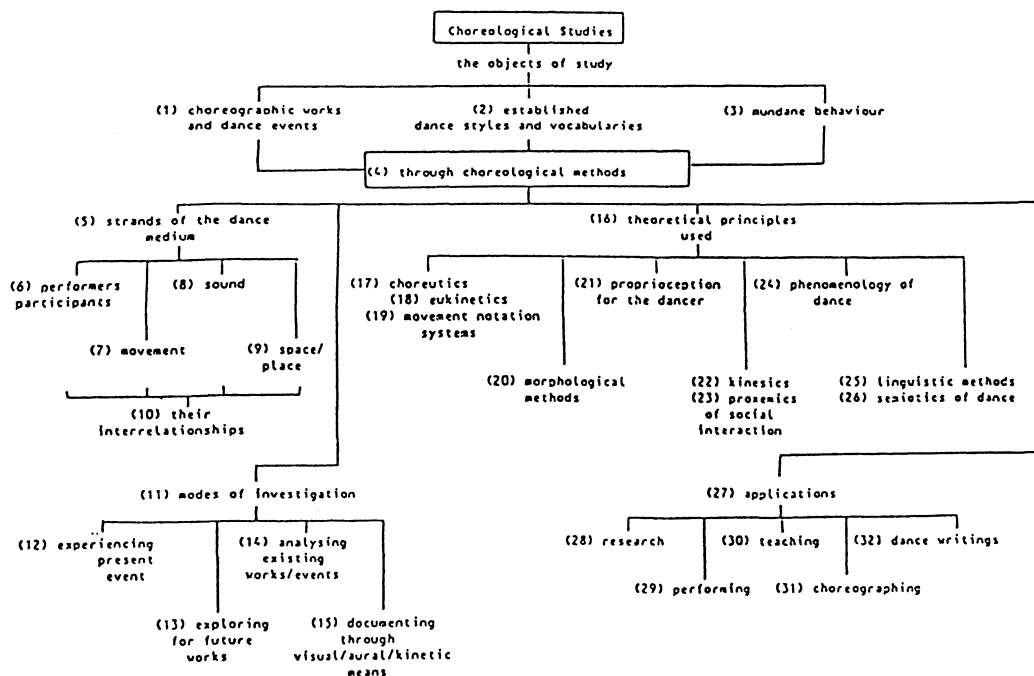
Action	gesture, transference, travel, turn, twist, contract, extend, jump, balance
Body	Areas: chest, pelvis, trunk, head Limbs: arms, legs, upper arms, lower arms, hands, feet, neck Joints: shoulder, elbow, wrist, fingers, hip, knee, ankle, toes, vertebra(e)
Dynamics(Effort)	• Weight: light — firm      • Time: sustain — sudden • Space: flexible — direct • Flow: free(unrestrained) — bound(restrained)
Space	shape, size, level, direction, floor pattern, focus, gather, scatter
Relationship	same as, opposite to, support, touch, near
<b>Notation (Labanotation)</b>	



N = Notation (Labanotation)  
a = Action  
b = Body  
d = Dynamics (Effort)  
s = Space  
r = Relationship

( i ) Movement の分類

( ii ) Movement Study の構成  
(舞踊を応用対象とした場合)



( iii ) コレオロジー (Choreology) の体系  
V. Preston-Dunlop '90

図-1 ラバンセンターにおける基幹科目の変容：Movement StudyからChoreologyへ

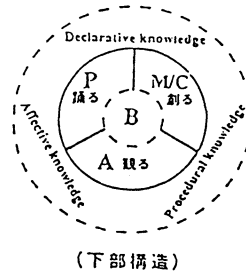
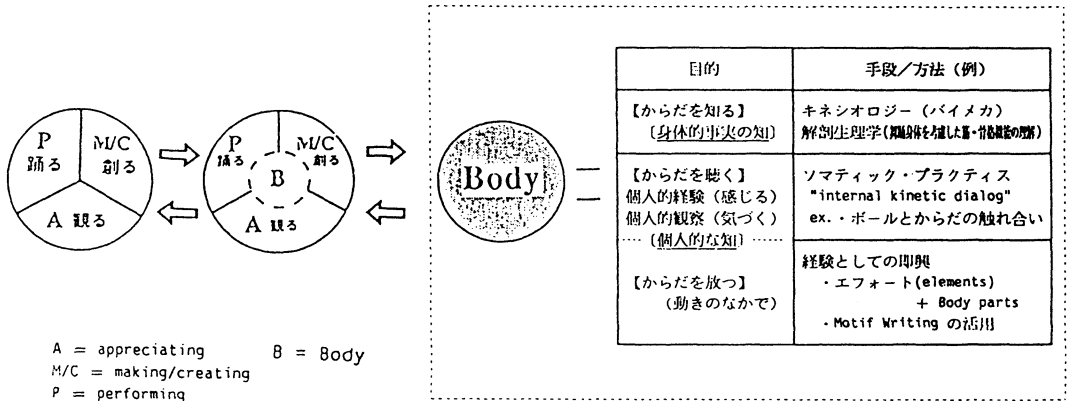


図-2 舞踊教育の基本構造とその「下部構造」

\* 1993年度秋季第36回舞踊学会  
『舞踊学』第16号より転載